

ただ一人友のたより打たえて淋しきまゝに春逝かむとす

夏

初夏のおとづれきけば白雲の湧き出づる山のこひしかりけり
むし暑き一日は暮れて山里のあちらこちらにひぐらしの鳴く

秋

亡き友よ今はいづこに在するや君と語りし秋は來たるに
こほろぎの鳴く音うれしき友ときくすぎ行く秋の夜半の一とき
秋風に木々の葉寒く散りそめてつめたく成りぬ夕暮の道

冬

何氣なく取りし夕ホルの冷たさにひとしほ寒し初冬の朝
さら／＼と雑木林に風立ちて冬の短日くれて行なり
故郷の冬田につづく雑木山楢にみゆるあはき夕月

日 記 抄

辰 巳 紫

山原に霧たちこめてこの朝け梵鐘の音ふかくこもらふ
春あさき種蒔くと我が堀る土ゆこがり出でし冬籠り虫

音のみが、空しく夜長の寂しさを語つてゐる。

母

久 世 寛 瑞

「母」お母さん。」この言葉は僕にとつて
親み深く感ぜられるのである。子供が母を
呼ぶこの聲を聞く時は、僕はいつもやさし
い慈愛に満ちた母の顔を頭の中に思ひ起す
のである。世の中には西洋文明の讚美者、所
謂新しがりやが、母のことを、子供に「マ
、」と呼ばせてゐるのを聞くが、何となく
空な、そして親しみが薄い様な気がする。
やはり日本人は日本人らしく「お母さん」
と呼んだ方が遙かに親しみ深く眞實がこも
つて居ると思ふ、

世の中に母性の愛ほど偉大なものはない
その恩ほど極めて深く高いものはない。母
性愛と云ふものは人間ばかりでなく、あら
ゆる動物でさへ特に持つて居る共通した貴
いものである。どんな高貴な人でも、賤し

いつとせを學び終りてやすらけし春の日なたに種蒔かむとす

照る波をまぶしみひとふなべりにまむかひ立てば言ふこともなき

かたくなの吾をなぐさむるひとの瞳とふとかちあひて心しびれぬ

爆音をつゝめる雲のすさまじき動きを透きて影をみとめぬ

刻々と生活へ及ぶたゝかひの餘波にそなへてつゝましき街

くりごとを言ひつゝのぼる坂道に雲のむらだち夕焼を見つ

空雷の止みし夕べの山頂にさやけく月の上りたるかも

救はるゝと云ふを信じて老若男女一堂に籠り祈れるをきく

所在なく部屋にこもれば玻璃越しに木の葉落して雨の來る見ゆ

定まらぬおもひなるから夜あらしの雨戸をたゝく音に夢みつ

散りしきる百來紅に射す光の粗きが儘に秋ならむとす

冷えびえと友の微笑が背に泌みる萩の花咲く細き野の道

木犀の香にたつ露路に踏入りてたゞならぬ巷の相をぞ見き

い身分の人でも。子を思ふ母親の愛には變

りがない。昔から今までに子供の爲に犠牲

となつた母は數限りなく多い。偉人も多く

は、母の偉大な獻身的の愛に感化されたの

であつて、近江聖人とまでいはれた中江藤

樹先生や孟子の母はこの好い例であらう。

一個の生物として生れ出てから、眞の人

間と成つて社會に出るまで、否社會に出て

から後までも何事に依らず教を受け、世話

になるのは皆母である。その間母は子と喜

びを共にし、また如何なに悲しみ、苦しみ

も共にして、絶えず子の側にあつて教訓と

慈愛の光を子の上に投げて、一生涯死ぬま

で子の爲に盡すのである。故に僕等は母の

海

長 崎 湛 長

それは尋常六年の時であつた。山國の眞

ん中に育つた僕は、それまで一度も海を見